

使徒言行録16章11節－15節

『祈り場のある川のほとり』

パウロたち一行の伝道旅行は始まりました。伝道の旅に出るにあたっては、盟友バルナバとの別れということがあり、旅を始めると、パウロ自身の描いた計画通りには事が進まない、というようなことが連続して起こってきました。けれど、パウロはそのような中で、幻を見、マケドニア州にわたって伝道を進めていく、というヴィジョンが与えられるのです。

使徒言行録をゆっくり通読していただくと気づくことですが、使徒言行録は16章以降とても記述が細かく、臨場感豊かな描写になっていきます。それまでは比較すればさきわめて簡潔に、要点を書き記していく筆運びであったのに、16章以降ではその書き方に大きな変化がみられるのです。理由ははっきりしています。

使徒言行録の著者ルカがこの二回目の伝道旅行以降は同行しているからです。先週読んだところで、10節に「わたしたち」という表現が出てきます。つまりここから先の旅はルカも同行しているわたしたちなのです。つまり資料や伝承による記録としての伝道旅行ではなく、自分もそこに具体的に参加した旅なのです。福音伝道の旅の喜びや苦しみ、光栄が自分自身そこに身を置いた者として描かれていくのです。

さて一行はサモトラケ島に寄港して翌日ネアポリスの港に着き、そこで船を降り、マケドニア州の大きな都市で、ローマの植民都市であるフィリピの町に到着します。植民都市、という言葉はわたしたちには耳慣れないものですが、ローマ帝国の退役軍人や、帝国で働いていた者たちのためにつくった町で、おそらく従来からの町に加えて新たな入植地区を作った町のことです。ローマの直轄都市で直接のローマの庇護と支配下にあった町です。パウロたちはここで数日滞在します。数日しか滞在できなかった理由は16節以下に出てくるのですが、猛烈な迫害に遭うからです。しかし伝道地としては期待通りの手ごたえがあったのです。後にパウロがこの地に立てられた教会に宛てて書いた手紙「フィリピの信徒への手紙」を読むと、パウロとこの教会の人たちの関係が深いものだったことがよくわかるのです。

一行は安息日に町の門を出て、祈りの場所があると思われる川岸に行きました。

最初期のキリストの伝道は、まずその町のユダヤ人の会堂に安息日に行って

ユダヤ人であるキリスト者がユダヤ人に向かってキリストを宣べ伝える、ということであったようです。しかし、それは次第に変化していきました。ユダヤ人がいても会堂のないところもあったでしょうし、そもそもユダヤ人がいない町もあったでしょう。フィリピの町にはユダヤの会堂はなかったのかもしれませんが。パウロは、会堂のない町でどんな場所で人々は祈るのか、自分なりの判断で祈り場があるであろう川のほとりに行ったのです。そこで祈りにくる人たちに福音を語ろうとしたのでしょう。人々のにぎわいから少し離れた静かな水のほとりの場所、そこで祈りの場を求めてくる人々がいるとパウロは思ったのです。果たして祈り場で人々は祈っていたのです。それは女性たちだったというのです。

パウロはそこに座り、集まってきた人々に向かって福音を語ったのです。14節「ティアティラ市出身の紫布を商う人で、神をあがめるリディアという婦人も話を聞いていたが、主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話に注意深く聞いた。」

もとの言葉では、主が彼女の心を開き、パウロの語ることに耳を傾けさせた、となっています。彼女の心を開くのも、耳を傾けることもすべて主が主導権を持って導いた、と語っているのです。

ずいぶん前のことですが、ある方が「ここを読んでいると、わたしは素直な気持ちになり、波たった胸も鎮まってくるのを感じるんです。」とわたしに言われたことがあります。もうずいぶんと前の話です。そんなものか、と思って聞いたのですが、不思議に忘れられない言葉として、わたしの中でも次第に強く響いてくるのです。

パウロという人は、おそらく初代教会の中でも傑出した伝道者です。福音理解、という点においてもすぐれた人です。しかしそのパウロであろうが使徒言行録の著者ルカは、彼女の心を開くは主なのである、リディアという一人の女性が福音の言葉に注意深く聞くようになるのは、主の働きによるものなのだ、ということを淡々と書き記している。

確かにパウロは福音を語るのです。新しい場所で、祈り場を求めてやってくる人たちに、全力で福音を語るのです。しかし、心を開くのは主であり、福音を聞くものへと導くは主なのです。パウロは用いられている。パウロもそのことをとをいろいろなことを通して知らされてきたのではないのでしょうか。自分の考えた道が行き詰ったとき、主が道を示し、主が働いてくださる、そのことを信じて伝道へと向かっていったのでしょうか。

自分の力で福音を語り、自分の力で相手の心を開き、自分の力で福音を聞か

せる、というのなら、どんな人でも必ずいきづまります。すぐに行き詰ります。そもそも、福音は人間の力で伝わるものではないからです。

牧師になってから10年目までの人たちの研修会を教団で行っている、というお話を何度かしたと思います。牧師・教師たちは10年までの間にいろいろな壁にぶつかります。教会の中の間人間関係や、付属施設での責任者としての困難、と言った他の仕事でも当然ぶつかる問題のほかに、牧師は説教の困難に否応なくぶつかります。説教するためには勉強しなければならない。特に牧師になって間のないものは、蓄積がない。基礎的な学力を十分に養わないといけない。そのうえで分厚い本とも格闘しなければならない。しかし勉強は果てしない。しかも勉強したら説教できるというわけではない。勉強をしたうえで、信仰において聖書を読む、ということが求められる。そしてさらに聞き取ったメッセージを人に伝えなければならない。言語で表現しなければならない。毎週毎週必ず説教の時はやってくる。その重圧に押しつぶされてギブアップしてしまう人も当然います。登っていく山を見上げてうなだれてしまうこともある。絶望的な思いに駆られる時もある。

けれども、同時に牧師はそうやって説教という課題に毎週毎週ぶつかる中で、否応なく聖書を読む。何度でも読む。繰り返し繰り返し読むのです。そしてその中で、聞こえてくる声がある。それは、福音を宣べ伝える、という働きは、神が主役。主が働かれるのだ、という声です。14節の言葉です。この声が聞こえないなら牧師の仕事は続けられない。しかし、この声が聞こえてくるのなら、困難があるにせよ、自分の貧しさ、不足、を抱えつつも、み言葉を語り続けるのです。説教者であり続けるのです。あり続けることができるのです。

パウロも、そしてルカも、シラスもテモテも、この声を聞いていたのです。だからこそルカは14節の文章が書けたのではないか。

聖書を読む。何度でも読む。そこでわたしたちは結局、自分の内面に深く響く声と出会っていくのだと思います。キリストからの言葉が自分に向けて語られた言葉として、自分の中で響き続ける言葉として聞こえてくるなら、わたしたちはそれによって文字通り活かされるのです。読むのも聞くのもわたしたちの働きかけです。しかしその根底に主の働きと導きがあるのです。

リディアはもちろん熱心にパウロの言葉を聞いたでしょう。しかしそこでまちがいなく彼女の心を開いた方がいるのです。

リディアは神を崇める人であったと記されています。それは彼女がユダヤ人ではなかったけれど、ユダヤ人の信じる神と何らか出会っていたということ

しょう。

その彼女と家族が、パウロの語るイエス・キリストの福音を聞いて、救いの言葉を聞いた、ということなのです。

彼女はキリストの救いの中にある自分を知って、家族の者と共に感謝と喜びのうちに洗礼を受けた。

彼女はパウロたち一行に『わたしが主を信じるものだと思いでしたら、どうぞ、わたしの家に来てお泊りください。』と言ってわたしたちを招待し、無理に承知させた。」臨場感あふれる文章です。リディアはパウロたち一行を自分の家に招いた。それはたんにお茶でも飲んでいってください、ということとは違って、自分の家を伝道の場所として開放する、自分の家を祈りの場所にする、ということの意味していました。事実パウロたちはこうした一人の信徒の家を拠点に伝道を展開したのです。彼女は紫布を商う人だったというのですが、それはとても高価な布である程度の資金力がなければできない商いであり、彼女自身が商業組合のような組織のメンバーだったでしょう。パウロたちは投獄されたためにリディアの家を早々に出ることになったのですが、このリディアの家がフィリピ伝道の一つの拠点となったことは間違いないのです。鳥瞰図的に言えばこれはパウロたちのヨーロッパにおける最初の伝道です。もちろん彼らにそのような意識があったかどうか、なかったかもしれない。ただ神から示されたマケドニア州に行き、フィリピの町で手探りで、とにかく福音を語り始めた、ということだったのかもしれない。しかし、一行はあらためて知らされた。「主が彼女の心を開き、パウロの語ることに耳を傾けさせた」ということを。